千里金蘭大学紀要　p.23～34（2009）

フィジーの土地問題と民族対立

Land Issues and Ethnic Conflicts in Fiji

國井　哲義[1]

要旨

フィジーには、先住フィジー人とインド人の深刻な民族対立の問題がある。その対立を背景に、１９８７年から現在まで４回のクーデターと１回の軍の反乱があり、０９年の現在も軍事暫定政権が権力を掌握したままである。対立の第一の原因と考えられるのが、マタンガリ・システムと呼ばれる土地所有制度である。本稿は現地でのフィールドワークをもとに、入手できたさまざまな資料を用いて、土地問題と民族対立の歴史と現状、さらに今後の展望を論じたものである。

キーワード：マタンガリ mataqali,　民族対立 ethnic conflicts,　クーデター coup d'é-tat

はじめに

照りつける太陽と紺碧の海、白い砂浜、底抜けに明るく人なつこい人々の住む南国の楽園――これらが多くの日本人のフィジーに対するイメージではなかろうか。もちろんそのイメージが間違っているわけではない。現地に行けば、そのイメージ通りのフィジーに出会えるであろう。

しかしそれはフィジーの一面でしかない。そこは同時に、クーデターが何度も繰り返され、激しい憎悪が渦巻く民族対立の島でもある。筆者が本稿を執筆したのは、フィジーが抱える深刻な対立とその原因に光を当て、この国の意外な一面を知っていただきたいと考えてのことである。

筆者は08年３月下旬、１週間あまりフィジー共和国に滞在する機会を得た。フィジーはニュージーランドの首都ウエリントンの北２５００キロの南太平洋に浮かぶ大小３３０余りの島からなっている。陸地面積はほぼ四国と同じ。人口は８２万人あまり、首都はフィジー最大の島、ヴィティレヴゥ島のスヴァである。

この旅の案内人は北口学氏。彼はかつて青年海外協力隊の一員として3年半ほど現地に滞在した経験を持ち、当地の事情に大変詳しいため、案内していただくことになった。

筆者が所属する全国大学同和教育研究協議会は、これまでカースト制度現地研修のためにインドを6回ほど訪問している。そして不可触民の生活実態や差別の現状、解放運動の進展状況などの調査を行なっている。この会の事務局会議の折、会員からインド以外にも海外にフィールドワークの場を広げるべきではないかとの提案があった。そこで海外の人権状況を知るために、どこか深刻な人権問題を抱えている地域はないかと候補地を探していた。

ちょうど北口氏からフィジーが抱える深刻な民族問題についての話を聞かされていたこともあり、それなら将来のフィールドワークの候補地のひとつとして、まずは下見をしておこうということになったのである。

北口氏から、現地の事情については事前に若干の説明は受けていた。フィジー系住民とインド系住民が国民のほぼ同じくらいの割合を占めていること、インド系住民はフィジーがイギリスの植民地だった時代に、砂糖きび農場の年季契約労働者として連れてこられたこと、フィジー系住民とインド系住民の間に激しい対立があること、さらにはインド系住民のなかにカーストによる差別があること、などである。

筆者の予備知識はこの程度であった。ともかくどういうところか行ってみようと、われわれは関空から韓国仁川経由でフィジーのナンディ国際空港に降り立った。

ホテルで一夜を過ごして、翌朝北口氏がレンタカーを手配してくれた。われわれはナンディから国道を北上した。しばらく走って道路沿いの商店に立ち寄ったところ、奇異な光景が目に飛び込んできた。

1 Tetsuyoshi KUNII 千里金蘭大学生活科学部食物栄養学科　（受理日：2009年10月１日）

写真のように、店の窓ガラスやカウンターがすべて頑丈な金網で覆われているのである。飲み物を注文すると、カウンターの中のインド人店主が、わずかに開いた窓口から商品を手渡してくれた。店がどうしてこのような造りになっているのか北口氏にたずねると、フィジー人がインド人経営の商店に強盗に入る事件が頻発しているので、商店が自衛しているとのこと。このあと訪れた都市部でも、道路に面した商店の窓ガラスやショーウィンドーはほとんど金網で覆われていた。この国の抱える深刻な治安上の問題を垣間見る思いであった。

また、レンタカーであちらこちらの砂糖きび農場を見て回ったが、耕作されず放置されている農地をいたるところで目にした。耕作放棄地は、フィジー全体では広大な面積に上るはずである。どうしてこのようなことが起こるのか。

サッカー場で目にした光景も異様なものであった。選手も観客もインド人のみで、フィジー人の姿は皆無だったのである。後で北口氏に聞くと、フィジー人はラグビー、インド人はサッカーと、スポーツの好みまで異なっているとのことである。

ヒンドゥー教寺院やイスラム教のモスクに行く機会もあったが、中にいるのはインド人ばかりで、フィジー人の姿は皆無であった。一方、フィジー人の集落では、中心部にキリスト教の教会があり、彼らはほぼ１００％キリスト教徒であることがわかった。どうも両民族は同じ社会に住みながら、宗教、生活習慣、経済の基盤、スポーツの好みまで異なっていて、ほとんど交わることのないかたちで共存しているようである。

バナバ人の島、ランビ島で見た住民の現状もショックであった。島には、渡るための定期船も、船が接岸できる満足な港も一切ない。島内の交通機関は、１台のトラックがあるのみ。しかもそれは、われわれが島に着いた時には故障していた。そのため、島民の配慮で、そのトラックが船着き場にわれわれを迎えに来て宿舎に連れていってくれることになっていたのだが、それができなかったのである。

ランビ島には上下水道もなく、電気もディーゼル発電で１日数時間供給されるだけ。筆者はインドネシアの辺境の島々をこれまでに十数回訪れているが、これほど外的世界から隔絶され、ひどい貧困に陥っている地域を見たことはなかった。２１世紀の今日に至っても、彼らはなぜこのように孤立し、極度の貧困に陥っているのか、私にはどうしてもわからなかった。

短期間の滞在ではあったが、フィジー社会の抱えている問題が、かなり根の深いものであることは実感できた。日本に戻ってから、現地の南太平洋大学（USP）生協で買い求めた十数冊の書籍、インターネットで検索して得られた数編の論文、北口氏の助言などを参考にしていろいろ調べてみると、現地で見てきたいろいろな場面が何を表わしていたのかかなり理解できるようになった。以下は、現時点で筆者が理解することのできたフィジーの現状とさまざまな問題点、その背景についての報告である。

Ⅰ　現地で見たこと、感じたこと

１）フィジー人の村訪問

ナンディから北上し、ラウトカに向かう国道を走っていると、車輪が少し段差のあるところを踏んで車体がわずかに上下した。車道が村の中を通っているので、スピードを落とせとの合図である。そこはナイガラ村といって、フィジー人の村であった。教会があり、数人の女性たちがベンチに座っていた。教会の前には丸太をくり貫いたドラムが置かれている。集会や礼拝などで村人を集める時などに使うものであろう。教会は村落共同体での彼らの生活の要の役割も果たしているようである。フィジー人のほぼ100％はキリスト教徒であり、ヒンドゥー教徒やイスラム教徒が圧倒的に多いインド人と、このような点でも異なっている。

女性たちに「何をしているのですか（What are you doing?）」とたずねると、「くつろいでいます（We are relaxing！）」との返答であった。日がな一日くつろいでいるのが彼らの日常生活なのかもしれないなどと考えつつ、われわれが日本人であること、フィジーの社会を調べるためにあちらこちらまわっていることなどを伝えて、どのように生計を立てているのか聞いてみた。彼らの生活の基盤となっている血縁共同体、マタンガリ（mataqali）のことが念頭にあったので、生活の一端がわかるのではないかと思ったのである。

「ときどき花を売りに行っています」との返答であった。われわれの感覚からすれば、ときどき花を売りに行くぐらいで生活が成り立つのかと思われるが、それを可能にしているのがマタンガリという共同体のシステムなのであろう。

この共同体の中では、たとえば土地は個人の所有ではなく、マタンガリの共同所有である。個人は、家を建てるときや作物をつくるときには、マタンガリから土地を借りる。マタンガリは言わば原始共同体的な社会である。そのため彼らは、私的所有権に関する意識は薄く、衣食住の生活の全般にわたって、所有関係のあいまいな相互扶助の生活を営んでいると言われている。

北口氏が、家と家がくっついているのがフィジー人の村の特徴です、と教えてくれる。なるほど家の建て方も、フィジー人とインド人ではまったく違う。フィジー人の集落では、家と家の間隔が狭く、お互いにくっついて建てられている。それは、村落共同体における個々人の距離の近さの反映である。それに対して、農村部でのインド人の家屋はお互いに間隔が開いており、各々の家が独立している。生活様式の違いが家の建て方にまで影響を及ぼしているのである。

このような共同体での生活に慣れたフィジー人が、たとえ商売を始めても、なかなかうまくいかないであろう。彼らは市場経済の基本となる私的所有の観念そのものが希薄だからである。旅行案内書『地球の歩き方』には、こんなことが書かれていた。フィジー人が店を開くと、親戚や友人たちが押しかける。もちろん店のオーナーもビジネスライクに付き合うことはせず、「付け」や格安で商品を売ってしまう。そして店は結局、破産の道をたどるというのである。

こうしてみると、インド人の砂糖きび農家や漁民を苦しめている、マタンガリ・システムと呼ばれる土地や漁業権のリース問題も、フィジー人からすれば、自分たちが長年営んできた共同体の生活様式の延長線上にある慣習に過ぎないことがわかる。

しかし貨幣経済の発展によって、フィジー人の村落共同体も崩れてきているとも言われている。さらに経済のグローバル化によって、マタンガリ・システムを崩そうとする巨大な力が働いている。このような観点でみると、フィジー人は、伝統的な共同体での生活と、それを破壊しようとする力との相克の中でもがいているようにも見える。

たとえばナンディやスヴァといった大都市の通りでは、日本製の乗用車やオートバイが走り回り、家電製品売り場には、最新型の薄型テレビが陳列されている。そのような光景を目にすれば、彼らの所有欲はいやおうなく刺激されるであろう。

しかし欲しいものを手に入れるためには、まずお金を手に入れなければならない。そのためには、現金収入をあまり必要としない村落共同体での生活を改め、たとえば農業においても、自給自足のために必要な作物を栽培する農業から、換金作物を中心とする農業への転換を図らなければならない。あるいは村落を離れて、賃金労働者として都会に出て行かなければならない。それが伝統的な生活様式の破壊へとつながるのである。

フィジー人は、そのような巨大な力に抵抗し、土地所有者としての自らの既得権と生活様式を守ろうとして必死にもがいているのが現状である。

2）インド人農業労働者とカースト制度

０７年の統計では、フィジーの人口は８２万人あまりで、フィジー系が５７％、インド系が３７％、その他が６％となっている。なぜこれほど多くのインド人がこの島に住むことになったのか。

インド人がこの地にやって来たのは、一言で言えば、イギリスの植民地政策の結果である。彼らは１８７９年から１９１６年の間に年季契約労働者として、主に砂糖きび農場の労働力として送り込まれたのである。総数は累計で６万人余りだった。契約期間は５年で、労働時間は１日９時間。１週５日半の労働で、１０年働けば政府の負担でインドに帰れる、という契約であった。ここからインド人労働者の過酷な労働、病気、殺人、虐待などの苦難の歴史が始まる。しかし契約期間が過ぎても、およそ６０％のインド人がこの島に残った。（Ahmed Ali, *The Fiji Indian Achievement*, inc. in *Pacific Indians*, USP）

現在では、農業以外にも、漁業に携わる者、商業をはじめとするサービス業に従事する者、官公庁に勤める者な

どあらゆる部門でインド人の姿を見かける。

ラウトカの漁港に何隻かの漁船が停泊していたので、船内に乗り込ませてもらって漁師に話を聞いた。彼はインド人でイスラム教徒だという。

インドでは、私の見聞した限りでは、漁民のカーストは下層シュードラか不可触民であった。かつて初めてのインド・カースト制度現地研修でゴアに行ったとき、魚を高く持ち上げながら、大声で客の呼び込みをしている魚売りがいたが、彼はイスラム教徒であった。またコルカタ（カルカッタ）の被差別地区に行ったとき、そこは下層シュードラと不可触民の混住地区であったが、大半の住民の職業は魚の行商であった。

ヒンドゥー教徒にとって、漁業や魚の販売は殺生戒を犯すということで賤業とされており、下層シュードラ、不可触民、イスラム教徒がその担い手となっている。おそらくはこのフィジーの漁民が漁業を営むようになった背景にも、そのようなカースト制度に基づく職業観があるのではないかと思う。

フィジーにやって来たインド人のカーストの構成はどうか。バラモンや他の上位カーストが１６％、農業カーストが３１．３％、職人カーストが６．７％、下層カーストが３１．２％という数字がある。（Ahmed Ali, *Girmit—The Indenture Experience in Fiji*）

ここで農業カーストと職人カーストと言われているのがシュードラで、下層カーストと言われているのが不可触民であろう。砂糖きび農場での労働という目的からして当然のことではあるが、やはり下層カーストが多い。

インド本国でカースト制度は、とくに農村では依然として社会を規制する強力な紐帯として働いているが、インド人がフィジーのように大量に移民として住みついたところでは、カーストはいったいどうなっているのか、このことが現地に行く前は私の最大の関心事であった。

ナンディのホテルで日本の旅行会社のスタッフから、フィジーでは、肌の色の白いインド人は肌の色の黒いインド人とは結婚したがらない、との話を聞いた。私はそのとき直観的に、これはカースト差別に違いないと思った。

カースト制度は、インドではヴァルナと呼ばれている。ヴァルナとは色、すなわち肌色のことである。カースト制度とは、肌の色の白いアーリア系の上位カーストの人間が、肌の色の黒いドラヴィダ系の人間を差別するシステムであるとも言えるのである。同じカースト（あるいはサブカースト）に属する男女が、何千年にもわたって結婚を繰り返すことによってカースト制度は維持されてきた。そのためアーリア系とドラヴィダ系はほとんど混血せずに現在に至っている。だから私は、色白のインド人が色黒のインド人と結婚したがらないというのは、カースト差別そのものだと思ったのである。

事の真相を確かめる良い機会が訪れた。スヴァのホテルに滞在していたとき、北口氏が、面白いインド人がいる、と若いカップルを紹介してくれたので、ビアガーデンで彼らと話をした。若い男性はヴァヌアレヴゥ島の砂糖きび農家の出身であるという。

見れば男性のほうが女性よりもかなり色が黒い。私は頃合いを見はからって「肌の白いインド人は肌の黒いインド人との結婚を嫌うそうですね」と聞いてみた。彼は言下に否定した。女性も、そんなことはありえない、と言わんばかりに笑っていた。

インドでは、カーストの垣根を越えた結婚は、都市部ではともかく、農村部ではまずありえない。これは０６年１２月の北部インド、ビハール州の農村での聞き取りで確認できたことである。不可触民の様々なジャーティ（サブカースト）の人々が混住する村で聞き取りをしたが、不可触民同士でもジャーティが違えば、結婚はまずあり得ないということだった。

しかしフィジーでは、異カースト間の結婚はかなり普通のことになっているのかもしれない。インド人とフィジー人との結婚はほとんどないのが現実なので、インド人にとって、相手のカーストをいちいち気にしていたら結婚相手がいないということになるのかもしれない。

彼は否定したが、フィジーのインド人のなかには、カースト差別が残っていて、時として頭をもたげてくることはあるようである。北口氏の友人のインド人映画監督に聞いたところでは、本国のような厳格なものではないが、時として、たとえば結婚の際に、肌の色、親のカーストや出身地、言語集団による差別が見られるとのことである。

別の日のことであるが、ラウトカ近郊のインド人の砂糖きび農家を訪問して、いろいろ話を聞かせてもらう機会

があった。その家の若い娘さんが英語を話すことができて、われわれの聞き取りに応じてくれた。少しぶしつけであるとは思ったが、彼女がカーストのことをどのように考えているのか知りたくなって「あなたはどのカーストに属しているのですか」とたずねてみた。それまでこちらの質問に丁寧に答えてくれていた娘さんが、笑って答えようとしなかった。しかし彼女が笑いながら後ろにいる父親に話しかけた言葉のなかに「ハリジャン（不可触民）」という言葉が聞こえた。

インド人がこの国で受けている差別には、こちらの質問に真剣に答えてくれていた彼女が、自分のカーストのことになるとこのような態度に豹変したのである。カーストの問題はインド人社会内部のことなので、軽々しく外国人に話すことのできない、微妙で、それだけ深刻な問題が含まれているということなのかもしれない。

3）製糖産業

フィジーには主要な産業が3つある。砂糖、衣料、観光である。これらの産業はすべて、今日それぞれ非常に困難な問題に直面している。ここでは砂糖産業を取り上げよう。

砂糖は、１２０年にわたって同国の最大の輸出品目であった。それは、年間2億5千万から3億フィジードルを稼ぎ出している。しかし近年、これが大変な苦境にある。後述するが、借地契約の切れた農地の７０％が新たな借地契約がなされないまま放置されており、そのため砂糖きびの生産高が大幅に減少しているのである。2007／08年度は、悪天候の影響などもあり、生産高が粗糖換算で２４万9千トンにまで急減した。前年比２１％減で、近年で一番生産量の多かった1994／05年度の実に半分以下である。（Ganesh Chand, *The CERD Papers, Vol.1*）

北口氏の案内でラウトカ近辺の製糖工場をいくつか見て回った。どの工場もその日は操業中ではなかったが、外見からでも経営状態が思わしくないのはすぐにわかった。どの工場も巨大な錆びた鉄の塊といった様子で、長い間設備投資がほとんどなされていないのは明らかであった。

後で知ったが、フィジー産の砂糖は、生産設備の老朽化や輸送効率の悪さなどによる生産性の低さと放漫経営のために、国際価格をはるかに上回る価格になってしまうのだという。粗糖の大部分は特恵価格でEUや米国に輸出されていたために、一応危機が回避されていたが、この優遇措置の期限が０７年に切れてしまった。フィジー経済を支えてきた最大の産業が危機に瀕しているのである。

4）ランビ島の現状

ナンディ空港から国内便に乗って、日付変更線が通過している島、タヴェウニ島に飛んだ。そこからさらに、バナバ民族の住むランビ島に渡るためである。この島はヴァヌアレヴゥ島とタヴェウニ島の間にある。

北口氏は長年バナバ民族の問題に取り組んでこられて、彼らの歴史や現状に大変詳しい。彼は、ランビ島の現状を紹介するNHK-BSスペシャルドキュメント「南太平洋　失われた楽園　リン鉱石の島はいま」（１９９７年5月）の制作にも加わっている。

われわれはソモソモの港で待っていたが、チャーターしたランビ島からの迎えのボートはなかなかやって来なかった。結局、われわれはその日、そこのリゾートホテルに一泊せざるをえなくなったのだが、後で聞いた島民の話では、ガソリンを買うお金がなくて来られなかったのだという。ランビ島には、島に渡るための定期便は一切なく、行くためにはボートをチャーターしなければならないのだが、そのボートの所有者が手持ちのお金がなくて、われわれを迎えに来られなかったのである。

次の日、船外機をつけた小さなボートが迎えに来た。ボートを操縦している男たちは、顔つきが今まで見たフィジー人（メラネシア系）、インド人ともまったく違う。見るからに精悍な顔立ちである。

北口氏によれば、彼らはミクロネシア人の少数民族であって、大変悲劇的な歴史を背負っている。以下、彼が制作にかかわったNHKの番組「南太平洋　失われた楽園　リン鉱石の島はいま」から、この民族の歴史を粗描してみる。

彼らはもともと赤道近くの、わずか6平方キロメートルのバナバ島に住んでいた。しかしこの島が、海鳥の糞が

堆積したリン鉱石でできていたところから彼らの悲劇が始まる。20世紀初頭、まずイギリスがこの島を植民地にして、肥料の原料となるリン鉱石を採掘する。その後第二次大戦中の１９４２年１２月、日本軍が上陸してこの島を奪い取り、キリバス人、ナウル人などを使ってリン鉱石を採掘する。日本軍による住民虐殺事件も起きているという。

日本の敗戦後、バナバ人は、英国植民地政府とリン鉱石採掘のための国策会社、英連邦リン鉱石公社 BPC（British Phosphate Commission）にだまされ、バナバ島から南へ3000km 以上も離れたランビ島（現フィジー共和国領）に強制移住させられる。このような経過をたどって、彼らは今ランビ島に住んでいるのである。

このドキュメンタリー番組によれば、かつて１万人以上の住民がいたバナバ島は、現在住民が４００人。リン鉱石が掘りつくされ、サンゴの岩がいたるところににょきにょきと突き出た、まるであばただらけの月面のような、植物の育たない荒廃した孤島となっている。

こうしてバナバ人は現在、バナバ島とランビ島という３千キロも離れた２つの島に分かれて住むことを余儀なくされているのである。

バナバ人たちはBPC に対して、１９７５年ロンドンで裁判を起こす。主な争点は２つであった。ひとつは１９１１年に英国政府が、バナバ島を元の状態に戻すと約束したが、それを履行するかどうかということ。もうひとつは、バナバ人がリン鉱石の値段もお金の価値も知らずに結ばされた採掘権料の見直しである。

裁判は１９７６年１１月に結審したが、判決は到底島民を納得させるものではなかった。島の原状回復は認められなかったのである。保証金も日本円にして１億円程度が認められただけであった。

バナバ人が移住させられたランビ島は、現在極度の貧困状態に置かれている。ディーゼル発電以外の電気も上下水道もなく、島に渡る定期船もない。もちろんこれといった産業もないために、彼らは現金収入の道もほとんど閉ざされている。

フィジー現地で入手した書籍（*Fijian Studies Vol.4,No.1,*May 2006）のデータを基にして、島の現状を粗描してみよう。

島の行政は「ランビ島評議会（Rabi Island Council）」（右の写真の建物の中にある）という、民主的な選挙で選ばれた自治政府によって執行されている。財源は、英国での法廷闘争で得た基金約１億円（北口氏の話では、この基金は横領や詐欺や運用の失敗などで、すでにかなり目減りしているという）の海外での運用益によってまかなわれている。フィジー政府の財政援助は一切ない。この自治政府が島の唯一の公的な雇い主である。教師、警察官、看護師などの公務員が住民の約30%を占めているが、彼らの給料はこの評議会から支出されている。

また、バナバ人はフィジーの公的な市民権を認められていない。２００５年に３ケ月間に限って、帰化による市民権の請求が認められたことがあったが、それ以外は市民権獲得の道も閉ざされている。

島民の主な仕事は生存農業と生存漁業である。農業に関して言えば、フィジーと同様の土地制度がランビ島でも採用されており、土地を個人が自由に保有することはできない。自治政府がすべての土地を一元的に管理していて、農民にリースする。農民は、土地が個人所有でないため、債務の担保として使用することはできない。このシステムでは、大土地所有が発生して、地主と小作人の対立や、極端な貧富の差を生むことなどはないが、農業が近代的な産業として発展する可能性もまたありえない。やはりこのままでは生存農業の域を脱することはできないであろう。

そのような現状のなかで、唯一現金収入の道となっているのが、カヴァの木の栽培である。カヴァはヤンゴーナとも呼ばれ、南太平洋一帯に生えるコショウ科の木である。ランビ島で、根が乾燥のために干してあるのを見たが、おそらく島外に運ばれて、貴重な現金収入のもとになるのであろう。

カヴァの根を乾燥させて粉状になるまで砕き、布の袋に入れて、水に溶かして飲む。日本のお茶やお酒のように、客を招いたり、人が寄り集まったりするときには必ずこれが飲まれる。私もホテルや、フィジーに出稼ぎに来ているバナバ人のスヴァでのパーティで飲む機会があったが、渋みのある味で、とてもうまいと思うまでには至らなかった。やはり、子供のうちからこの味に慣れなけれ

ば、とても賞味するところまではいかないのであろう。

島の漁業も生存のためのものであり、島民には漁業権がないため、取った魚を売ることはできない。漁業権もフィジー人のマタンガリの所有となっているためで、もしも本格的な漁業を行なおうとすれば、マタンガリに入漁料を支払わなければならない。現状では、漁船と漁具を購入し、入漁料を支払い、本格的な漁業を行なうにはさまざまな障害があるように思われる。まずそのための資金がどこにも蓄積されていない。また大型の漁船が停泊できる港湾施設さえ一切ない。この島では、漁業が近代的な産業として発展する道が、ほぼ完全に閉ざされているのである。

しかしこれは大変ひどいことだと言わなければならない。彼らは周囲を海に囲まれて生活しながら、漁業を生活の糧にすることができないのだ。

ちなみに行政府のある港の近くには、冷蔵施設の残骸が放置されていた。北口氏によれば、かつて法廷闘争で英国政府から得た資金で、漁業を島の有力な産業にしようとして購入したものだが、結局うまくゆかず、放置されているのだという。

世帯主の54%を女性が占めている。異常な多さだが、これは多くの男性がフィジーなどでの出稼ぎのために島を出ていることを意味している。

１か月の収入は、60%の家庭が50〜100フィジードル（3500円〜7000円）であり、フィジーの基準でも90%の家庭が貧困ライン以下の生活である。

電力はディーゼル発電によって、1日３〜４時間供給される。われわれが泊まった宿泊施設でも、夜９時には電灯が消え、ろうそくの明かりだけが頼りの生活になった。テレビを所有する家庭も少数で、われわれが訪れたいくつかの家庭では、ほとんど家電製品らしきものは見当らなかった。

では島民の娯楽は何かというと、カヴァパーティやビンゴゲームであるという。そのような折には、貴重なガソリンを焚いて自家発電用のエンジンを回し、夜遅くまで歌を歌ったりする。筆者は首都スヴァで、バナバ人のパーティに参加したことがあったが、みんなでカヴァを飲みながら、ギターに合わせて夜更けまで大合唱をしていた。彼らはこのようにして仲間同士の連帯感を維持しているのだろう。

宿舎の近くにある小学校を訪問した。校長先生が、いろいろと親切に現状を説明してくれた。校舎や施設にも壊れたままのところがあったが、数年前の台風によるもので、資金不足で修復もままならないのだという。先生方に支払う給与も、とても十分な額ではないとも語っていた。一見して教育設備、教材なども非常に不足しているようであった。

授業はすべて英語で行なわれていた。教師たちの熱心な授業と、生徒たちの真剣な態度がとても印象的であった。

前述の NHK の番組の中で、BPC に対する裁判闘争でリーダー役を務めていたトマシ・テアイ（故人、当時彼は島の裁判長でもあった）は、祖先が十分な教育を受けられず、リン鉱石の価値もお金の価値もわからなかったため、英国政府や BPC にだまされ、民族の悲劇を生んだとの痛切な思いを語っていた。教育こそ民族再生の鍵であるとの彼の思いは、島民全員に現在に至るまで受け継がれているのであろう。

２年生のクラスでは、女性教師が一人ひとりの生徒に親の職業を答えさせていた。ほとんどの生徒の答は、「My father is a farmer.」というものであったが、口ごもってなかなか答えられない生徒にも、教師は辛抱強く答を待って、答えられるとやさしく褒めてあげていた。何気ない授業風景だが、教師の生徒に対する愛情が感じられて、とても印象的であった。貧しい離島で教育が立派に行なわれていることに、正直なところ救われる思いがした。

島を離れるボートの中で、バナバ人たちの置かれている現状に対する激しい怒りが込み上げてきた。そしていろいろな考えが頭の中を駆けめぐった。何か産業を興すことはできないものか。どのような産業でも良いが、島民に働く機会ができれば、少しはましな生活が実現できるのではないか。まず港を整備して、定期船が往来できるようにする必要があろう。生存農業と生存漁業はつづけながら、豊かな自然を生かして観光開発などはできないものだろうか、などなどである。

北口氏によれば、バナバ人は概して寡黙だが、非常に勤勉で、気質も日本人にとても似ているという。働く場が与えられさえすれば、彼らはきっと今の状態から抜け出して、もっと豊かな社会を築けるのではないか。私はこの

ように思わずにはいられなかった。

Ⅱ　民族対立

１）対立の原因と現状

フィジー人とインド人の対立は根深く、その歴史は長い。そして対立の根本は、ひとえに土地問題にあると言える。フィジーには、１９８７年以来４回のクーデターと１回の軍の反乱があったが、これらはすべて土地問題と深いつながりがあると思って間違いはない。

フィジー人は血縁共同体を意味するマタンガリ（mataqali）という伝統的共同体組織の中で生活をしてきた。それは原始共同体的な、私的所有の観念の乏しい社会組織である。たとえば土地も個人のものではなく、マタンガリの共同所有である。１８７４年、フィジーがイギリス領となった際に、植民地政府によって土地の売買は禁止されたが、それが独立後も継承され、現在に至るまでつづいているのである。

イギリスの植民地政策は、ポルトガルやスペインのそれとは違って、植民地の社会構造には手を付けず、経済的な搾取のみに専念するものであった（インドのカースト制度がそのまま残ったのもそのためである）と言われているが、フィジーでも、イギリスはマタンガリには手を付けなかった。現在、フィジー全体の８３％の土地がマタンガリの所有地である。私有地（フリーホールドランド）は１０％程度、残りは国有地である。

マタンガリの中で生活するフィジー人たちは、たとえばタロやキャッサバといった彼らの主食に当たる作物を栽培するにも、マタンガリから土地を借りて耕作する。そして他人が栽培した作物でも、ある程度勝手に収穫することも認められているという（西村知、「キャッサバ生産にみるフィジーの伝統的農村」参照）。彼らの共同体には、厳密な意味での私的所有関係が存在しないと言える。彼らの現金収入の道は、余剰農産物や余剰魚介類の販売、地代などである。地代は先住民土地信託局（Native Land Trust Board)を通してマタンガリに渡され、首長から構成員に分配される。彼らの収入は少ないが、その生活形態が自給自足を基本としており、現金収入をそれほど必要としない。

すでに述べたように、フィジー人は私有財産の観念の乏しい生活をしているために、一般に商売は不得手だと言われている。なるほどフィジーには、彼らが経営する企業や商店はほとんど見当らない。商店経営者は、インド人か、最近急激に人口を増やしてきている中国人である。道端で卵や魚を売っているのは、ほとんどがインド人であった。私が見た中で、フィジー人の経営する商店は、首都スヴァの屋台での焼き肉売りぐらいであった。

そういうフィジー人にもグローバル化の波、貨幣経済の波は容赦なく押し寄せてくる。スヴァなどの都会の街角では、田舎から出てきたと思われるフィジー人の若者たちをよく見かけた。彼らは所在なさそうにたむろしていた。おそらく、彼らの周りには欲しいものがあふれているのであろう。しかし都会に出てきた彼らには、仕事も遊ぶ金もない。彼らの中には、欲しいものはお金がなければ手に入らない貨幣経済の現実を思い知らされて、時として暴力に訴える者がいるのであろう。前述のごとく、フィジーでは通りに面した商店のガラスがことごとく金網で覆われているが、それはこのことを物語っている。

こういうこともあった。首都スヴァのホテルに滞在していたとき、私は熟睡していて気付かなかったのだが、北口氏によると、彼の部屋の前の通りでフィジー人による路上強盗があり、警察が来たり、人々が騒いだりで、うるさくて一晩中一睡もできなかったとのこと。もちろん、われわれ外国人が街を歩いていて危険を感じるようなことはまずないが、全体的に言えば、治安はかなり悪化しているようである。

北口氏によれば、フィジー人の中には、この国はもともと自分たちのものなのに、なぜ自分たちにはお金がないのか、という思いに駆られる者が少なくないという。豊かなインド人や中国人と貧しいフィジー人という民族間の格差が、近頃一層拡大していると言われている。

近年、大勢のフィジー人が農村から都市に流入して公営住宅などに住みつき、無職者としてスラムを形成している。首都スヴァで、車の中からではあるが、そのようなスラムを見る機会があった。北口氏によると、彼らの多くは家賃、光熱費などは一切支払っていないという。

夜になると、バーなどの店の前にも屈強なガードマンが配置されていた。北口氏によると、フィジー人は一般に大柄で、暴れだすと手がつけられなくなるので、トラブルに備えてガードマンが配置されているとのことである。

なぜこのようなことになったのか。これを理解するには、次のことを想像していただきたい。マタンガリという血縁共同体での生活を基本とする社会に、外国から新参者がやって来たのである。

まずインド人が、１９世紀末から２０世紀初頭にかけて砂糖きび農場労働者としてやって来た。さらに近年中国人が、１９９７年の香港の中国返還などを契機として大量に移住して来る事態を迎えた。彼らニューカマーは、祖国とはまったく異なる所有関係を基本とする社会の中に入って来たのである。

インド系農民をはじめ、新しくフィジーにやって来た者にとっては、マタンガリという土地所有制度のために、土地を資産として所有する道はほとんど閉ざされている。彼らは一生地代を支払いつづけなければならず、そのためにも必死で働かなければ生活できない。また土地所有の道が閉ざされているために、農業に見切りをつけて商業など他の産業に進出するインド人も多かった。砂糖きび農業や商業活動などでフィジー経済を支えているのは、実質的に彼らなのである。

マタンガリの所有地を一元的に管理している役所が先住民土地信託局（Native Land Trust Board、右の写真の建物)である。NLTB は１９４０年に設立され、一切の土地の貸借の許認可を行なっている。この役所は賃貸料の２５％を差し引いて取り分とする権限を持っており、残りの７５％がマタンガリに渡される。NLTB の管理下で、フィジー人が土地を所有して地代を受け取り、インド人がそれを使用して地代を支払うという構図ができあがった。いわばフィジー人は不在地主として、インド人が生み出す富に寄生するかたちになっているのである。

フィジー人にしてみれば、実際に土地を使用しているのはインド人で、自分たちは土地使用の実権を奪われているとの意識が強い。また、自分たちこそ土地の所有者なのだから、もっと多くの富の分配を受けて当然との思いがある。これが土地のリース更新時の、彼らの非妥協的な態度につながっている。そのためリース契約の期限が来ると、自分たちで畑を耕す意志や技術がなくても、契約の更新を拒否する場合が多い。

８０％の地主が土地を返してもらいたいと思っており、契約期限切れ農場の７０％で耕作者が不在という。１９９３年以来、契約の期限切れとなった借地のうち、現借地人にリースが更新されたのは、２００２年の時点で２７％だけである。このためフィジーには現在、不耕作地、荒蕪地がいたるところに存在している。そして主要な産業である砂糖きびの生産が大幅に減少するという結果を招いているのである。

一方のインド人にしてみれば、いくら働いても土地所有は事実上不可能ということになり、永久に小作人としての立場から脱出することができない。しかも借地期限が来れば、契約が延長されない可能性が大きい。あるいは延長されても借地料が大幅に引き上げられる可能性もある。契約の延長が拒否されれば、その土地で農業ができなくなるだけでなく、住み慣れた住居を解体し、そこを引き払わなければならなくなる。立ち退きまでに、一応１２ヶ月間の猶予が与えられることになっているが、実際上は猶予期間が与えられないことも多い。

このような状況の中で、インド系住民の自殺者が増加している。２０００年の統計では、自殺者、同未遂者の91％がインド系の人々であり、しかもそれは砂糖きび栽培地域に集中している。

また、２０００年5月から２００２年4月にかけて、フィジーから１３７５８人が他国に移民しているが、そのうちインド系が８８％を占めている。それも、高学歴の熟練労働者の移住が増えており、行き先はオーストラリア、ニュージーランド、米国などである。これはフィジー経済にとっても大変な打撃であろう。われわれがモミ要塞の近くで聞き取りをしたインド人の元砂糖きび労働者も、親類の多くが米国で働いていると言っていた。

そのためフィジーの人口の中で、かつてフィジー系とほぼ同じであったインド系住民の割合は現在３7%で、その人口比率は年々減少しているのである。ちなみに現在のフィジー系住民の割合は５７％である。多数のインド系住民の自殺や移民は、彼らがフィジーの現状と将来に絶望しての結果であろう。(Ganesh Chand, *The CERD Papers, Vol.1*)

ただ、こういうこともあった。ナンディ空港近くの、一軒のインド人農家で聞き取りをする機会があったが、その農民は、自力でお金を貯めて農地を買い、現在は自作農だと語っていた。フィジーで自由に売買できる土地（フリーホールドランド）は全体の１０％程度であり、自分の土地を手に入れることのできる農民はごく少数であるが、このように自分の土地を手に入れることのできたインド系の農民も、実際にいることはいるのである。

２）土地問題の歴史的背景

前項では、マタンガリ・システムと、それが引き起こす民族対立の構図を見てきた。ここではこの問題の歴史的な経過を資料（Ganesh Chand, *The CERD Papers, Vol.1*）に基づいて簡単にたどってみよう。

１９６９年に、土地を農業用地として貸す場合、借地期間を１０年と定めた「農地貸借法（Agricultural Landlord and Tenants Act)」が成立した。１９７０年、フィジーはイギリスから独立する。政権を握ったのは、フィジー系のマラ率いる同盟党（Alliance Party）であった。この政党はフィジー系の優位を保ちながらも、インド系にも配慮して、両者のバランスを取ろうとした。

１９７６年には農地貸借法が改定されて、借地期間を３０年に延長するとされた。インド人の不安への一定の配慮がなされたのである。しかし今度はこのことが、フィジー人にはインド人を利するものと映った。このような状況を背景に、フィジー人の土地所有権の保護やインド人への土地貸与中止を訴える、排他的、民族主義的な運動である「タウケイ（Taukei）運動」が勢いを増してくる。ちなみに「タウケイ」とは、「先住民」や「所有者」を意味するフィジー語である。

１９８７年、総選挙で同盟党が敗北し、インド系を支持基盤とする国民連合党（National Federation Party）と、労働組合を支持基盤とするフィジー労働党（Fiji Labour Party）の連立政権が成立する。このような政治情勢は、フィジー人にとっては、ますます自分たちの権利を危うくするものと映った。フィジー人には、経済をインド人に握られてさらに政治まで握られたら、自分の国でいったい何をよりどころにすれば良いのか、という危機感があったのである。

フィジー人の危機意識を背景にして、１９８７年５月、フィジー系のランブカ中佐がクーデターを起す。彼は憲法の停止を宣言し、フィジー人の権利が侵されないように憲法の改定を唱える。これでフィジー系とインド系の対立は決定的なものになった。

ランブカ政権（９２年から政権を握る）は、国有地の半分をフィジー系に無償譲渡し、これがインド系や国民連合党の反発を受ける。またこの政権は、国営企業の民営化にも力を入れた。これにともなって、フィジー系、インド系ともに、特権的な富裕階級が出現する。このことが、フィジーの政治情勢を左右する一層複雑な背景をもたらすことになった。つまりふたつの民族間の対立に加えて、もうひとつの軸、すなわち特権的富裕層と、その特権には浴さない一般の人々との対立軸が出現することになったのだ。特権階級が自分たちの利益を守るために政治活動に訴えるようになり、それがフィジー全体の政治状況に影響を及ぼすようになったのである。

１９９９年に総選挙があり、ランブカが敗北する。初のインド系首相であるチョードリー政権が発足し、土地使用委員会（Land Use Commission）を設立する。政権はこの委員会に、NLTB を介さずに、遊休地を特定して借地人に提供する役割を担わせようとした。広大な遊休地を生み出してしまうそれまでのやり方を改めて、土地の所有と使用をめぐる問題の解決を図ろうとしたのである。

しかしこのことがフィジー系の反発を招き、反政府運動（タウケイ運動）が激化する。そしてマタンガリ所有地の借地権更新拒否の動きが拡大する。

このような状況の中で、２０００年５月、民間ビジネスマンのジョージ・スペイト（フィジー系）のクーデターが発生する。彼の率いる武装集団が、チョードリー首相をはじめ閣僚３０名を拘束する。スペイトは、土地の所有権などで、フィジー系住民に至上の利益を保障する憲法の制定を要求した。国内は一時無政府状態に陥ったが、バイニマラマ国軍司令官が交渉にあたって戒厳令を発令し、スペイトと合意文書を取り交わし、人質は解放された。そしてスペイトは逮捕される。

このクーデターの背景に、ふたつの民族間の利害の対立があるのは明らかであるが、それ以外の要素の存在を指摘する見解もある。それよれば、このクーデターは、自分たちの権益を守ろうとするフィジー人の強欲によって引き起こされたものではなく、特権的フィジー人ビジネスマンの利益が、チョードリー労働党政府の福祉を中心とした政策、すなわち平等主義によって脅かされることに対する反発から引き起こされたものなのだという。スペイトの本当のねらいは、３億米ドルに上るとみられているマホガニー輸出の利権を獲得することにあったとも言われている。（Ganesh Chand, *The CERD Papers Vol. 1,* P.48）

なるほどそのように見れば、民間人ビジネスマンのスペイトがクーデターを起こした理由もある程度合点が行く。彼は、フィジー系全体の利益を守ろうとしたというよりも、フィジー系社会の中での一部特権階級の利益を守ろうとして決起したのである。

われわれ部外者が、フィジーの複雑な政治情勢の襞のひとつひとつに踏み込んで、それを明らかにすることは決して容易なことではないが、ここで言われているように、民族間の抗争がフィジー系内部の抗争を隠す、いわば隠れ蓑として用いられることがあるのだという見解は傾聴に値する。フィジー系のエリートが、富と権力を強化する手段として民族抗争を利用することがあるというのである。

ともかく両民族の対立だけを軸にしてフィジーの政治情勢を読み解こうとすると、現状を読み違える危険のあることをこの見解は示している。

このクーデターを契機として、フィジー系土地所有者とインド系農民との対立が激化し、借地契約の更新が拒否される事例が一層多くなる。そのためフィジーは、砂糖きびの作付面積が急激に減少する事態を招いてしまう。フィジー全体で、０１年には作付面積が６６０００ヘクタール余りあったものが、０６年には５５０００ヘクタールに減少しているのである。

０１年８月には総選挙を経てフィジー系のガラセが首相に就任し、低迷する砂糖産業の立て直しを進めた。しかし野党との対立が激化し、彼は０６年３月、議会を解散する。同年５月には、ガラセ率いる統一フィジー党が議会の過半数の議席を獲得し、彼は首相に再任される。新ガラセ政権は労働党をも含めた複数政党内閣を組閣し、フィジー系、インド系の対立を改善して、未解決の問題の解決に取り組もうとした。

しかし０６年１２月、バイニマラマ国軍司令官による無血クーデターが起こる。彼は、最初は権力の座を降りると言っていたが、それは実行されず、０７年１月、イロイロ大統領がバイニマラマ暫定内閣を任命する。ちなみに国軍兵士（兵員約３５００名）はほとんどがフィジー系によって独占され、バイニマラマもフィジー系の利益を代表している。

このクーデターの経済への打撃は大きかった。治安状況への不安から、観光客が激減するなど、とりわけ観光業界への影響が甚大であった。０６年の経常収支は７億米ドル余りの赤字であり、赤字幅は年々増大している。長年フィジーの経済を支えてきた砂糖産業の不振とあいまって、国家の経済は破綻状態である。０７年の GDP は前年比４.４％の減少であった。

フィジーの民主化に関する作業グループが太平洋諸島フォーラム（PIF、本部はフィジーに置かれている）の内部に設置され、民主化に向けたロードマップがつくられた。これを踏まえ、暫定政権は０９年３月までに総選挙を実施することに原則合意した。しかしバイニマラマ暫定首相は、選挙を実施するための前提条件を提示して、各政党や総選挙の立候補予定者に受け入れを強要したり、総選挙前にまず選挙制度の改革をすべきだと主張したりして、結局のところ総選挙は実施されなかった。

日本の外務省のホームページによると、０９年４月９日、フィジー控訴裁判所（第２審）は、０７年１月のイロイロ大統領によるバイニマラマ暫定内閣の任命が非合法であるとの判決を下し、中立的な暫定首相を任命するように命じた。しかし大統領は４月１０日、現行憲法を廃止し、すべての裁判官を罷免する。そして今後５年間の暫定政権を近く任命し、１４年までに総選挙を実施する、との声明を発表した。また大統領は、４月１０日夜、出版・報道への制限なども含む緊急事態令を発布し、バイニマラマ国軍司令官を暫定首相に任命した。

このようなフィジーの政治情勢に対して、近隣諸国、とりわけ最大の経済援助国であるオーストラリアやニュージーランドは態度を硬化させ、外交関係が悪化している。両国は一部分野への援助を停止しており、また軍関係者、暫定政権関与者およびその家族等の渡航に必要なビザの発給を停止するなどの措置を取っている。

これに対抗してフィジー暫定政権は、ニュージーランドの高等弁務官に、フィジーの国内問題に介入しつづけたとして「ペルソナ・ノン・グラータ（好ましくない人物）」を発動した。

最近の新聞報道では、オーストラリアとニュージーランドは、民主主義が回復されなければフィジーに新たな制裁を課す、との声明を出している。また国連の事務総長は、憲法が無効とされたことを非難して、憲法の回復を要求している。(The Daily Yomiuri, April 12, 09)

今後の展望

すでに見てきたように、フィジーの政治的な混乱の背後には民族の対立があり、さらに民族対立の背後には土地問題と経済格差がある。１９５０年代に始まったインド系とフィジー系の経済格差は拡大する一方である。この格差が民族主義と結びつくと、暴力的な対立に発展する素地が生まれる。役所やオフィスなどでフィジー系とインド系が一緒に働いているのを見たりすると、対立などどこにあるのかと思われるのも事実であるが、両者の潜在的な対立は非常に根深い。

ステレオタイプなお互いのイメージは次のようなものだと言われている。フィジー人にとって、インド人は利己的で欲張りで、信用できない人々であり、おまけに偶像崇拝者である。インド人にとって、フィジー人は怠け者で、粗野で、信頼できない人々である。

すでに述べたように、フィジー人は労せずして地代の分配を受けることができ、村落共同体で生活をしているかぎり、ある程度貨幣に頼らない生活も可能である。そのため経済観念に乏しく、あまりあくせく働こうとしないと言われている。

そのような彼らの、唯一の経済的なよりどころこそマタンガリ・システムなのである。彼らが必死になってこの制度を維持しようとしているのはそのためである。それは政治的にはタウケイ運動というような民族主義的、排他的な運動となって国政を揺るがすこともある。幾度となく繰り返されているフィジー人によるクーデターや政変は、フィジー人が必死になって、このマタンガリ・システムを初めとする権益を、インド人などの新参者から守ろうとして引き起こされたものと見ることができる。

フィジー人とインド人は、以上のようにまったく異なる経済環境に置かれている。民族間の反目、対立は非常に激しいが、つきつめてゆくと、それを引き起こしているものこそ、マタンガリ・システムと、それにしがみついているフィジー人社会であると言って過言ではない。

さてフィジーのこのような現状を前にして、われわれはどのような展望を描くことができるだろうか。事態は絶望的であるようにも見える。民族対立が緩和する兆しはまったくない。それどころか、それは一層激化する可能性もある。なにしろ１９８７年以来４回のクーデターと１回の軍の反乱があり、現在も軍事暫定政権がつづいているのである。

この危機は、ある意味で、近代化とグローバル化によって周縁に押しやられたフィジー人たちの悲痛な叫びと深い関係がある。彼らは、他の者が走りつづけているのに、自分たちは道端に取り残されていると感じているのだ。彼らにはまた、他の者がなぜそれほど走りつづけるのか、その理由がまったくわからない。だから少しでも譲歩すれば、自分たちはうち捨てられて顧みられなくなると思っているのである。

巨視的には、彼らは近代化とグローバル化という、現代世界のだれ一人として逃れることのできない巨大な波が押し寄せてくる中で、必死になってそれを押し返そうとしているようにも見える。相次ぐクーデターは、それを抑え込もうとする試みであろう。それは短期的にはある程度成功するかもしれないが、長期的にはおそらく不可能であろう。

現在の政治的、経済的危機から脱出する道は、いろいろ曲折はあっても、マタンガリによる所有制を改めて、土地の私有制を段階的に認め、個々人の財産権の保障と法の前での平等を実現すること、これ以外には考えられない。そうすることで民族間の融和も実現できるであろう。そうして初めて、フィジー系もインド系もなく、フィジー共和国に居住する人という意味での「フィジー国民（フィジアン）」が形成されるのではないか。現在は先住フィジー人を意味するこの「フィジアン」という言葉が、フィジー国民全体を意味する言葉に変るのである。

しかしこれは多くのフィジー人にとって、ある意味で、いままで通りの生活がつづけられなくなることを意味する。あるいは一時的には生活の基盤そのものを失うことになるかもしれない。改革によって到来するのは、自分の力で、自らが生み出した財で、自己責任で生きていかなければならない社会だからである。ともかく彼らにとって大変な苦痛を伴う変革であることは間違いない。しかしこの道を避けて通ることはできないであろう。それを拒否しようとすれば、彼らが恐れているように、世界の片隅に取り残されるだけだからである。

フィジーはいま、そのような重大な岐路に立たされているのだと私は思う。